

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

古典文における同格・提示・挿入の融合構文とその
読解：特集多様化する日本語研究の現在

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2023-02-05 キーワード: 作成者: 小田, 勝, Oda, Masaru メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000416

古典文における同格・提示・挿入の融合構文とその読解

小田 勝

一、はじめに

外山滋比古（一九八四）はかつて、「わが国の英語英文学界の誇るべき業績の一つに英文解釈法の確立がある」（二二七頁）といった。一方、我が古典文にそのような「解釈法」が確立されているかと省みると、個々の助動詞・助詞の意味用法などについては研究の蓄積が多いけれども、なお、汎用的な「古典文解釈法」というものは未だ確立されていないのではないかと思わずにはいられない。筆者は「古典文解釈法」として、例えば

次のような事項を構想しているが、本稿はこのうちの①について具体的に示し、「古典文解釈法」の確立の必要性を訴えようとするものである。

- ① 同格・提示・挿入構文の理解
- ② 補訳の原理
- ③ 代入の原理
- ④ 連体修飾、連用修飾構造
- ⑤ 係り受けの理解
- ⑥ 圧縮された句の解凍
- ⑦ 語句・文の推意
- ⑧ 修辭的表現の理解

本稿では、次の用例1の構文がどのような原理で成立しているのかを考えることを通して、古典文における同格・提示・挿入の融合構文の諸相を示したい。¹

という構造になっている。

1 この中納言殿（＝道隆）、才深う、人にわづらはしとおぼえたる人の、国々治めたりけるが、男子女子どもあまたありける、女の、あるが中にいみじうかしづき思ひたりけるを、男あはせんなど思ひけれど、人の心の知りがたうあやうかりければ、ただ、宮仕をせさせんと思ひなりて、先帝の御時に、おほやけ宮仕に出し立てたりければ、女なれど、真字などいよく書きければ、内侍になさせ給ひて、高内侍とぞ言ひける、この中納言殿（＝道隆）、よろづにたはれ給ひける中に、人よりことに心ざしありて思されければ、これをやがて北の方にておはしけるほどに、女君達三四人、男君三人出で来給ひにければ、…（榮花物語・卷三・さまざまのよろこび）

二、同格構文について

次例2・3のように、「名詞＋の＋準体言△」の形で、準体言の下の△に、助詞「の」の上にある名詞と同じ語が想定される構造を、「同格構文」という。2は「女君の、いと美しげなる」「女君」、3は「いと尊き老僧の、あひ知りて侍る」「老僧」

2 女君の、いと美しげなる△、生まれ給へり。（源氏物語・橋姫）（訳：女君で、たいそうかわいらしい様子の女君が、生まれなされた。）

3 いと尊き老僧の、あひ知りて侍る△に、言ひ語らひつけ侍りぬる。（源氏物語・夕顔）（訳：たいそう尊い老僧でよく知っております老僧に、言って頼んでおきました。）

この同格の助詞「の」は、表示されることがある。

4 「薰ノ」御けはひしるく聞きつけて、宿直人めく男△、なまかたくなしき△、出で来たり。（源氏物語・橋姫）（訳：（薰の）御気配をはっきりと聞きつけて、宿直人らしい男で、気のきかなそうな男が、出て来た。）

5 御車は簾おろし給ひて、かの昔の小君△、今は衛門佐なる△を召し寄せて（源氏物語・関屋）（訳：（源氏の）御車は簾を下ろしなさせて、あの昔の小君で、今は衛門佐になっている昔の小君をお呼び寄せになつて。）

4の句型について佐伯梅友(一九八八)は、「もう一つのはさみこみ」と呼んで、「なまかたくなしき」部分が挿入句であるという理解をしているが、そうするとなぜ句末が連体形であるのか説明できず、また5のように句末の連体形に助詞「を」が付属している例も説明できなくなる。このことから、この句型に対する最も合理的な説明は、 \square の部分に同格助詞「の」の非表示(ゼロ形式)を見る、という捉え方であろうと筆者は考えている(小田勝・一九九三)。すなわち4は「宿直人めく男^デゆ、なまかたくなしき「男」 \square という構造であると考えられる。

さて、2・3では「の」の下の準体言(以下、これを「同格構文の後項」と呼ぶ)は一つであったが、次例にみるように、同格構文の後項は複数立つことが可能である。

6 白き鳥 \square の、嘴と脚と赤き \square 、鳴の大きさなる \square 、水の上に遊びつつ魚を食ふ。(伊勢物語・九)〈訳…白い鳥で、嘴と脚が赤い鳥で、鳴の大きさである鳥が、水の上を飛びまわっては魚を食う。〉

7 清げだちて、なでふことなき人 \square の、すさまじき顔したる \square 、直衣着て太刀佩きたる \square あり。(源氏物語・東屋)

〈訳…小綺麗にしている、別段のこともない男で、興ざめの顔をしている男で、直衣を着て太刀を身につけている男が、いる。〉

助詞「の」を表示しない同格構文においても、同格構文の後項は複数立つことができる。すなわち、次例は、助詞「の」非表示の同格構文に、複数の後項が立ったものと理解される。

8 また、死にける良岑の四位の一つ子 \square 、花園といふ \square 、殿上童に使ひ給ひける \square 、年十歳ばかりなる \square 、かたち清らに心かしこし。(うつほ物語・藤原の君)〈訳…また、死んでしまった良岑の四位の一人っ子で、花園という子で、殿上童にお使いになった子で、年十歳ばかりの子は、顔立ちが美しく才知に富んでいる。〉

古典文の読解において、このような同格構造が俯瞰的に見える、ということはたいへん重要なことなのである。例えば、次例9・10のような古典文を見たときに、ここに付したような傍線と、 \square で囲った助詞「の」(または「ゆ」と、 \triangle 印と——これらは当然、本来の古典文には付いていないものである——が

見えなければならぬ。9・10位の長さになると、ここに示したような構造が見えずに（あるいは見ずに）、読点毎に頭から解釈してゆくというが行われがちであるが、そうすると陰路に落ち込むことになる。

9

容貌かたちきたなげなく若やかなるほどの、おのがじしは塵こぼもつかじと身をもてなし、文を書けど、おほどかに言選ことばりをし、墨つきほのかに心もとなく思はせつつ、またさやかにも見てしかたとすべなく待たせ、わづかなる声聞こぼくばかり言ひ寄れど、息の下にひき人れ言少こぼなる△が、「欠点ヲ」いとよくもて隠すなりけり。（源氏物語・帚木）

10

この入道の宮（＝藤壺）の御母後の御世より伝はりて、次々の「帝・后ノ」御祈りの師にてさぶらひける僧都△、故宮（＝藤壺）にもいとやむごとなく親しき者に思したりしを、おほやけ（＝帝）にも重き御おぼえにて、いかめしき御願ども多く立てて、世にかしこき聖なりける△、年七十ばかりにて、いまは終はりの行ひをせむとて籠もりたる△が、宮の御事（＝故藤壺ノ法要）によりて出でたるを、内裏（＝冷泉帝）より召しありて常に

さぶらはせ給ふ。（源氏物語・薄雲）

10は、「…僧都デ、…世にかしこき聖なりける僧都デ、…籠もりたる僧都が、（山カラ都ニ）出でたるを」、帝からお召しがあつて、と読むのである。

ところで、同格構文には次のような句型もある。

11

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬ△が、すぐれて時めき給ふ△ありけり。（源氏物語・桐壺）〈訳…どの帝の御代だっただろうか、女御、更衣が大勢お仕え申し上げていらつしやったなかに、たいして高貴な身分ではない方で、際だって帝の御寵愛を受けていらつしやる方があつた。〉

これは、「の」の上（これを「前項」と呼ぶ）が準体言ではなく、名詞句「いとやむごとなき際にはあらぬ人」であつたら、助詞「の」を用いて、

11b

いとやむごとなき際にはあらぬ人の、すぐれて時め

き給ふ△ありけり。

と表現される場所である。すなわち、11の「が」は、準体言を受けることができない助詞「の」に代わって同格構造を表示していると捉えられる。すなわち同格構文には、次のような規則が存するといえることができる。

12 同格を表す助詞「の」は、上が体言ではなく準体言であるとき、自動的に助詞「が」に置換される。

例えば次例13は、規則12による、13bからの変形である。

13 鈍色のこまやかなる△がうち萎えたる△どもを着て

(源氏物語・若紫)

13b 鈍色のこまやかなる衣のがうち萎えたる△どもを着て

同格の後項が複数ある場合、この後項末尾にも同格助詞を表示することができる。ただしその場合、同格の後項は一般に準体言だから、12の規則に従って、表示される助詞は必ず「が」である。

14 御文には、いと芳ばしき陸奥国紙の少し年経、厚き△

が黄ばみたる△に(源氏物語・玉鬘) (訳：御手紙には、たいそう香を薫きしめた陸奥国紙で、少し年数が経って、厚い紙で、黄ばんでいる紙に)

15 いにしへ、いみじうかたらひ、夜昼歌など詠みかほしし

人の、ありありても、いと昔のやうにこそあらね、たえずいひわたる△が、越前守の嫁にて下りし△が、かきたえ音もせぬに(更級日記) (訳：昔、非常に親しくつきあい、夜昼歌などやりとりしていた人で、歳月がたつても、昔のようではないにしても、絶えず消息を交わしている人で、越前守の妻となつて下つていった人が、消息が絶え何の便りもないので)

16 一条ノ北ナル小路ニ懸ル程ニ、年十六七歳許有ル童ノ、

形美麗ナル△が、ツキヅキシ気ナル△が、白キ衣ヲシドケナ気ニ中結タル△が、行キ具シタリ。(今昔物語集・一七四) (訳：一条の北の小路にさしかかった時に、年十六七歳くらいの童で、容貌の美しい童で、好ましい様子をした童で、白き衣を無造作に着て紐を腰のあたりで結んでいる童が、道連れになった。)

14、16の四角で囲んだ助詞「**が**」は、このような原理で表示されたものだから、この助詞「**が**」に特別な意味を讀もうとすると、誤訳が生じることになる。

三、提示句・挿入句について

最終目標である用例1の解析にあたって、次に考えなければならぬのは、17のような文構造である。本節では、この文の構造を考えてみよう。

17 「朱雀院ノ」御子たちは、春宮をおき奉りて、女宮たちなむ四所おはしましける。その中に、藤壺と聞こえしは、先帝の源氏にぞおはしましける、まだ坊と聞こえさせしとき参り給ひて、高き位にも定まり給ふべかりし人の、とりたてたる御後見もおはせず、母方もその筋となくものはかなき更衣腹にてもし給ひければ、御まじらひのほども心細げにて、大后の、尚侍なむしのかみを参らせ奉り給ひて、かたはらに並ぶ人なくもてなし聞こえ給ひなどせしほどに、気おされて、帝も御心うちの中にいとほしきものには思

ひ聞こえさせ給ひながら、おりさせ給ひにしかば、かひなく口惜しくて、世の中を恨みたるやうにて亡せ給ひにし、その御腹の女三の宮を、あまたの御中にすぐれてかなしきものに思ひかしづき聞こえ給ふ。(源氏物語・若菜上)

まず、次の文を考えることから始めよう。

18 此ノ牛、片山ニ一ノ石ノ穴有リ、其ノ穴ニ入ル。(今昔物語集・五31)

この傍線部「片山ニ一ノ石ノ穴有リ」は終止する形態をとっているが、

18 b ×此ノ牛、片山ニ一ノ石ノ穴有リ。

という文は成り立たないので、傍線部末で文が完全に終止するわけではない。18は主文中の「に」格成分である「石ノ穴」の「石」が、「片山ニ一ノ石ノ穴有リ」という句の形で提示され、それを「其ノ」という指示語で受け直して、主文の格成分とし

て組み込んでいる。このように、主文中の格成分に立つ名詞を一度句の形で提示したものを「提示句」という（小田勝・一九九六、二〇〇六）。提示句の例をあげる。

19 女子ハ多有リト云ヘドモ男子ハ無カリケレバ、其ノ郡

ニ高尾寺ト云フ寺有リ、其ノ寺ニ詣デテ男子ヲ可生キ事ヲ祈リ申ケルニ：（今昔物語集・一二・32）

20 「…。然レバ我レ、他ノ世界ニ行テカカル悲ビヲ不見ジ」ト思テ、上方ノ恒河沙ノ世界ヲ過テ仏ノ世界有リ、其ノ至テ有ル程ニ（今昔物語集・三〇）

提示句は二つ連続することもある。

21 国王此ヲ見給フニ、忽ニ罪ニ行ハム事ノ指ル故無ケレバ、可遣キ所有リト思テ宣ク、「汝ヂ、此レヨリ良ニ四十里行テ大ナル池有リ、其ノ池ニ四種ノ蓮花開タリ、七日ノ内ニ其ノ蓮花ヲ取テ可持參シ。若シ持来レラバ、汝ニ賞ヲ可給シ」ト。（今昔物語集・四二〇）

次に、次の文の構造を考えよう。

22 「この暁より、しはぶき病みにや侍らむ、頭いと痛くて苦しく侍れば、いと無礼にて聞こゆること」などのたまふ。（源氏物語・夕顔）

この文は、要するに、現代語の「朝から、風邪だろうか、頭が痛い。」と同様の構成であつて、「朝から、頭が痛い。」という文の中に、その原因理由の推測を表す別の文が、波線部として挿入された（はさみこまれた）ものと捉えられる。このような波線部を「挿入句」という。22の挿入句（以下、本稿では、挿入句を波線で示す）は主文の原因理由を表したものであるが、次例のように、上の語句の補足説明を表す挿入句も存する。

23 其ノ時ニ波斯匿王ノ子、名ヲバ流離太子ト云フ、積種ノ座ニ「我レモ積種也」ト思テ登ヌ。（今昔物語集・二二8）
24 今昔、震旦ノ隋ノ開皇ノ末ノ比、代洲ノ人、姓ハ王也、公ニ仕ヘテ、驃騎ノ將軍ト成レリ。（今昔物語集・九二1）

次例 25～27 は、提示句と挿入句とが同時に現れたものである (27 では、「羅漢」に対する補足説明を表す挿入句が二つ連続している)。

25 主人ノ云ク、「此ノ経ハ、我が大娘有リキ、早ク亡ジニキ、其ノ人在生ノ時ニ受持セシ経也」ト。(今昔物語集・七 20)

26 其ノ次ノ日、左門ノ府生掃守ノ在上ト云高名ノ絵師有リ、物ノ形ヲ写ス、少モ違フ事無カリケリ、其レヲ内裏ニ召テ(今昔物語集・二五 2)

27 大王哭キ悲ムテ、菩提樹ノ寺ニ一人ノ羅漢在マス、名ヲバ賽沙大羅漢ト申ス。其ノ人、三明六通明カニシテ、人ヲ利益スル事仏ノ如シ也。大王、此ノ羅漢ヲ請ジテ申シ給ハク(今昔物語集・四 4)

以上の構文を総合すれば、次例 28 は、28 b のような構造として捉えられる (傍線は提示句、二重傍線は提示された語句を受けける指示語、波線は挿入句を表す。以下同じ)。要するに、28 は「願ノ如ク悪竜ト成リテ、峒ヲ栖トス。」を主文として、各成分に対する提示と、それに対する補足説明とが複雑に連続している

のである。

28 願ノ如ク悪竜ト成リテ、□寺ノ 坤ニ深キ谷有リ、峻ク峻クシテ、恐シ気ナル事無限シ。其ノ谷ノ東ノ岸ニ壁ヲ塗タル様ナル高キ石有リ。其ノ石ニ大ナル峒ノ穴有リ、峒ノ口狭クシテ内極テ暗シ。其ノ峒、常ニ潤ヒ□テ水滴リ、此ノ大竜其ノ峒ヲ栖トス。(今昔物語集・三 8)

28 b 願ノ如ク悪竜ト成リテ、□寺ノ 坤ニ深キ谷有リ、峻ク峻クシテ、恐シ気ナル事無限シ、其ノ谷ノ東ノ岸ニ壁ヲ塗タル様ナル高キ石有リ、其ノ石ニ大ナル峒ノ穴有リ、峒ノ口狭クシテ内極テ暗シ、其ノ峒、常ニ潤ヒ□テ水滴リ、此ノ大竜其ノ峒ヲ栖トス。(今昔物語集・三 8)

以上の提示句、挿入句の句型を勘案すると、本節冒頭に示した文 17 は、次のような構造として捉えられることになる。

17 b 「朱雀院ノ」御子たちは、春宮をおき奉りて、女宮たちなむ四所おはしましける。その中に、藤壺と聞こえ

しは、先帝の源氏にぞおはしましける、まだ坊と聞こえさせしとき参り給ひて、高き位にも定まり給ふべかりし人の、とりたてたる御後見もおはせず、母方もその筋となくものはかなき更衣腹にてもし給ひければ、御まじらひのほども心細げにて、大后の、尚侍を参らせ奉り給ひて、かたはらに並ぶ人なくもてなし聞こえ給ひなどせしほどに、気おされて、帝も御心の中にいとほしきものには思ひ聞こえさせ給ひながら、おりさせ給ひにしかば、かひなく口惜しくて、世の中を恨みたるやうにて亡せ給ひにし、その御腹の女三の宮を、あまたの御中にすぐれてかなしきもの思ひかしづき聞こえ給ふ。

すなわち、傍線を付した「藤壺と聞こえしは」から「亡せ給ひにし」までが「藤壺」を提示する提示句であり、二重傍線部「その」が提示された語「藤壺」を指す指示語である。そして、この提示句「藤壺と聞こえしは…亡せ給ひにし」は、名詞述語文で、その述語句「まだ坊と聞こえさせしとき参り給ひて、…人の、…亡せ給ひにし」(二人)が同格構文になっているのである。名詞述語文で、その述語句が同格構文というのは、次

のような文である。

- 29 かく言ふは、播磨守の子の、藏人より今年冠得たるなりけり。(源氏物語・若紫)

そしてこの提示句の主語「藤壺と聞こえしは」と述語「まだ坊と…亡せ給ひにし」との間に、「藤壺」に対する補足説明を表す挿入句(波線部)が介在しているのである。繰り返すが、このような文の場合、やみくもに読点毎に上から解釈してゆくのではなく、文構造を全体的に俯瞰することが重要である。

四、提示句の受け部について

次に、次例 30・31 のような文を考えてみよう。

- 30 然レバ、「藤原」伊勢人(一人名)、年来乗レル所ノ白キ馬有リ、鞍ヲ置キテ馬ニ云ヒ含テ云ハク(今昔物語集・
 一 35) (提示句を受ける指示語の非表示。其ノ)
 31 此仏ノ靈驗ヲ「国王は」伝へ聞テ、「何デ我が国ニ移シ奉テ、日夜ニ恭敬供養セム」ト願ケルニ、其国ニ宰相

有^きり、心^{こころ}極^{きま}テ賢^{さとし}ク思^{おも}慮^{おぼ}深^{こほ}カリケリ、 ϕ の國王ニ申テ、
宣^{おほ}ヤ蒙^かテ、彼ノ国ニ渡リテ (今昔物語集・一一一五)
示。 ϕ || 其ノ、 ϕ || 宰相

30の傍線部は「馬」を提示する提示句であるが、18〜20に照らせば、「 ϕ 」部分に「其ノ」のような、提示された「馬」を受ける指示語が欠如している (指示語が非表示である)。31ではさらに、提示された「宰相」を受ける指示語「其ノ」と、指示語を受ける名詞「宰相」(あるいは「人」など)との双方を欠いている。すなわち、32 a (|| 用例18) に対して、30は32 bの、31は32 cの構造をしていると捉えられる。

32 a 此ノ牛、片山ニ一ノ石ノ穴有リ、其ノ穴ニ入ル。(|| 用例18)

b 此ノ牛、片山ニ一ノ石ノ穴有リ、 ϕ 穴ニ入ル。

c 此ノ牛、片山ニ一ノ石ノ穴有リ、 ϕ ノ入ル。

和文には33〜35のような句型がよくみられるが、ここまでの考察から、これは、32 aのような提示句を基礎構造としつつ、そ

の提示された語句を受ける指示語と名詞 (+ 格助詞) との双方が表示されていない32 cの句型であるとみることができると、 ϕ の部分に、表示されていない指示語と提示された語——33は「その殿に」、34は「その君の」、35は「その妻(方)」——を見ることで、実はこれが、32 cと同型であることが知られるだろう。

33 故兵部卿の宮、わか男にて、一の宮と聞こえて、色好み給ひけるころ、承香殿はいと近きほどになむありける、 ϕ のらうあり、をかしき人々ありと、聞き給うて、ものなどのたまひかはしけり。(大和物語) (訳: 故兵部卿の宮が、まだ若くて、一の宮と申し上げて、色好みでいらっしやうった頃、承香殿はたいそう近い所にあつた、(そこに) 世馴れて、すばらしい人々がいると、お聞きになつて、話をかわしあいなさつた。)

34 同じ太政大臣 (|| 藤原忠平)、左の大臣の御母菅原の君かくれ給ひにけり、 ϕ の御服はて給ひにけるころ、亭子の帝なむ、内に御消息聞こえ給ひて、色ゆるされ給ひける。(大和物語) (訳: 同じ太政大臣は、左大臣の御母、菅原の君がお亡くなりになつた、(その人の) 御喪があ

けなさつたころ、亭子の帝（宇多上皇）が、帝（醍醐天皇）にお手紙を申し上げなさつて、禁色（しんじき）の勅許をお受けになった。

35

かやうにて明かし暮し給ふに、中の君の御乳母なりし人はうせにしが、むすめ一人あるは、右大臣の少将の御乳母子の左衛門尉といふが妻なり、ゆゆたぐひなくおはするよしを語りけるを（堤中納言物語・思はぬ方に泊りする少将）（訳…このようにしてお暮らしになるうち、中の君の御乳母であつた人は亡くなつた、その人が娘一人あるのは、右大臣の（息子である）少将の御乳母子の左衛門尉といふ人の妻である、（その人が、中の君は）世になく（美しく）いらつしやる旨を話したのを。）

五、課題文の解決

ここに至つて、本稿で課題とした用例1の構造は、次のように捉えられることになった。まず、基礎にあるのは、提示句とそれを受ける指示語という基本句型（↓用例32a）である。今までと同様に、提示句に傍線を、提示された語（ここでは「高内侍」）を受ける指示語に二重傍線を付して示してみよう。

1 b この中納言殿（＝道隆）、才深（さいふか）う、人にわづらはしとおぼえたる人の、国々治めたりけるが、男々女子（おとこをむすめ）ども

あまたありける、女（むすめ）の、あるが中にいみじうかしづき思ひたりけるを、男あはせんなど思ひけれど、人の心の知りがたうあやうかりければ、ただ、宮仕（みやつか）をせさせんと思ひなりて、先帝の御時に、おほやけ宮仕に出（い）し立てたりければ、女なれど、真字（まな）などいとよく書きければ、内侍になさせ給ひて、高内侍とぞ言ひける、この中納言殿（＝道隆）、よろづにたはれ給ひける中に、人よりことに心ざしありて思されければ、これをやがて北の方にておはしけるほどに、女君達三四人、男君三人出で来給ひにければ

さて、この提示句（傍線部）の内部構造であるが、主語は、「才深（さいふか）う、人にわづらはしとおぼえたる人の、国々治めたりけるが、男々女子（おとこをむすめ）どもあまたありける」で、これが「人」を表す、二つの後項からなる1cのような同格構文になっている。

1 c 才深（さいふか）う、人にわづらはしとおぼえたる人^の、国々治

めたりける△が、男子女子どもあまたありける△

「を」格もまた、「女」を表す、1dのような同格構文になっている。

1d ^{むすめ}女、あるが中にいみじうかしづき思ひたりける△

そして、1cの名詞句が全体で「が」格に立ち、1dの名詞句が全体で「を」格に立ち、それを受ける述語が「男あはせんなど思ひけれど」である(すなわち「1cの「人」が、「1dの「女」ヲ、「男あはせんなど思ひけれど」という句になっているのである)。以上を要するに、用例1は、1eのような構造をしているということになるのである。

1e この中納言殿(≡道隆)、才深^とう、人にわづらはしとおほえたる人の、国々治めたりける△が、男子女子どもあまたありける△が、女^{むすめ}の、あるが中にいみじうかしづき思ひたりける△を、男あはせんなど思ひけれど、人の心の知りがたうあやうかりければ、ただ、宮仕^{みやつかい}をせさせんと思ひなりて、先帝の御時に、

おほやけ宮仕に出し立てたりければ、女なれど、真字^{まな}などいよく書きければ、内侍になさせ給ひて、高内侍とぞ言ひける、この中納言殿(≡道隆)、よろづにたはれ給ひける中に、人よりことに心ざしありて思されければ、これをやがて北の方にておはしけるほどに、女君達三四人、男君三人出で来給ひにければ、：

六、おわりに―「古典文解釈法」の確立を目指して―

以上のように、古典文には、同格・提示・挿入が融合した文があるので、古典文の解釈にはこれを適切に把握する必要がある。また、考察の過程で示した次のような構造も適切に把握されなければならない。

- (1) 同格構文における助詞「の」の非表示(用例4・5・8・10)
 - (2) 同格構文の後項の助詞「が」の表示(用例14・15・16)
 - (3) 提示語句の受け部の非表示(用例30・31・33・35)
- 特に、(1)(3)は形式がないところに形式(ゼロ形式)をみ、そのゼロ形式が作る構文を俯瞰的に把握するということが求められる。

本稿に示したような、古典文の構造を理解する観点（いわば「目の付け所」）が次々と発掘されて、古典文解釈のルールとして、二十、三十と蓄積されるならば、その時初めて、我が古典文にも「解釈法」が確立された、ということになるであろう。

注

- (1) この構文理解は、筆者の既発表論文、小田勝（一九九三、一九九六、二〇〇五、二〇〇六）で得られた知見を融合したものである。したがって、本稿揭示の用例は、その多くを同拙稿に負っていることをお断りする。
- (2) 用例は、『今昔物語集』は新日本古典文学大系に、それ以外はすべて新編日本古典文学全集による。引用にあたり、表記は私意によって改めた。
- (3) 準体言の下の△に名詞を想定するという扱いの正当性は、小田勝（二〇一五、三五七頁）に述べてある。
- (4) 9の私訳「容貌がこぎれいで若々しい年ごろの女で、自分としては塵もつかないようにおめかしをし、手紙を書いても、おっとりとした言葉遣いを選び、墨付きもほんのりと気がかりなように思わせては、もう一度はつきりと見たいものだ」と待ち遠しい思いをさせ、ようやくわずかな声を聞くことができるくらいに近く言い寄っても、声を飲み込んで言葉数が少ない女が、欠点を非常によく隠すのだった。10の私訳「この入道の宮（藤壺）の御母后のご在世中から引き続いて、代々の（帝・后の）御祈祷の師としてお仕え申し上げてきた僧都で、故宮

（藤壺）もたいへん徳が高く信頼できる師と思っいらつしゃったが、帝にも重く信頼され、重大な御願も多く立てて、世に評判の聖であった僧都で、年七十歳くらいで、今はこの世の最後の仏道修行をしようと思っ（山に）籠っている僧都が、故藤壺の宮のご法要のために（山から）出てきたのを、帝よりお召しがあって、常にお仕え申し上げさせなざる。」。

(5) 「藤壺」は朱雀院の皇女の一人ではなく、女三宮の母だから、「その（四所ノ女宮達ノ）中に、藤壺と聞こえしは、先帝の源氏にぞおはしましける。」という文は成立しない。「その中に」は遠く「女三の宮を」に係るのである。

(6) 17の私訳「お子様たちは、東宮をお除き申し上げて、女宮たちが四人いらつしゃった。その中で、『藤壺と申し上げた方は、——先帝の（皇女で）賜姓源氏でいらつしゃった——まだ（院が）東宮と申し上げたとき入内なさって、高い位にも定まりなさるはずだった人』で、『格別の御後見もいらつしゃらず、母方もこれといった家柄ではなく何となく頼りない更衣腹でいらつしゃったので、宮中での御生活の間も心細い様子で、太后（弘徽殿）が、尚侍（朧月夜）を参上させ申し上げなさって、他に並ぶ者もなくお扱い申し上げなさりなしたうちに、気圧されて、帝も御心の中で気の毒な者だとはお思い申し上げなさりながら、退位してしまわれたので、（入内した）甲斐もなく落胆になり、自分の不運を恨んでいるような様子でお亡くなりになった人』である。」、その藤壺がお産みになった女三宮を、（院は）多くの（子供たち）の中で特にかわいいものだと思っお育て申し上げなさる。」。

(7) 私訳「この中納言殿（道隆）は、『学問に秀でて、人に気が置けると思われていた人で、諸国を（受領として）治めていた人で、男女の子が多くいた人』が、『その人の』娘で、子どもの中でとても大切に思っていた娘」を、夫をもたせようなどと思っしたが、男の心はかりがた

く危惧されたので、専ら宮仕えをさせようと思うようになって、先帝の御時に、宮中の宮仕えに出仕させたところ、女ではあるけれど、漢字などをみごとに書いたので、内侍にさせなされて、高内侍と言った、(その高内侍を) この中納言殿(道隆)が、あちこちの女性と恋におはれていらっしやった中で、誰よりも特に愛情をもってお思いになつたので、この高内侍をそのまま北の方としてしらっしやるうちに、女君が三、四人、男君が三人お生まれになったので……。文頭の「この中納言殿」は「おはしける」に係る主語であるが、傍線部の後でもう一度繰り返されている。

引用文献

小田 勝(一九九三)「の」助詞非表出の同格構文をめぐって『国語研究』

五六

(一九九六)「提示文—今昔物語集における複雑な句連続—」『国

語研究』五九

(二〇〇五)「名詞残存型準体句をめぐって—提示文の準体句化—」

『岐阜聖徳学園大学紀要(外国語学部編)』四四

(二〇〇六)『古代語構文の研究』おうふう

(二〇一五)『実例詳解古典文法総覧』和泉書院

佐伯梅友(一九八八)『古文読解のための文法 上』三省堂

外山滋比古(一九八四)『新・字問のすすめ』講談社学術文庫

付記

本稿は、講演「ゼロ形式が作る古典文の構造—古典文の正確な把握のために—」(平成二八年六月二五日、龍谷大学国文学会学術講演会、および、講演「空範疇と古典文解釈—古典文の正確な把握のために—」(平成二九年七月一日、國學院大學国語研究会)で話した内容を活字化したものである。

注1に示したように、本稿は、筆者の複数の既発表論文の知見を、「古典文解釈法」という視点からまとめ直したものである。